

# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



## 合田 直弘

11月9日にドンカスターで行われた開催をもって、英国における24年の芝平地シーズンが閉幕した。この日をもって、調教師の座から退いたのが、半世紀以上にわたってニューマーケットを拠点に采配を振るってきた、伯楽サー・マイケル・スタウト(79歳)だった。

スタウト厩舎にとつて最後の出走馬となったのは、6日にノッティンガムで行われた開催の最終競走に組まれた、「グッバイ・フォー・2024・フロム・ノッティンガム競馬場ハンディキャップ」と銘打ったハンデ戦(芝14F)で、ここにワンダーラスト(牝3、父ヴァルドガイスト)が登場。同馬の手綱をとつたのは、スタウト師にとつて最後のクラシック制覇となった22年のG1英国ダービーで、勝ち馬デザートクラウンの鞍上にいたりチャード・キングスコートだった。

スタウト師の管理馬が出走するのは、これが最後と知つた競馬ファンは、こまめに4戦未勝利のワンダーラストを、オッズ3.25倍の1番人気に支持した。だが、中団につけた同馬は、残り3Fからずるずると後退。残念ながら最下位に敗れ、スタウト厩舎は有終の美を飾ることが出来なかった。

1945年10月22日、英国連邦に属するカリブ海の島国バルバドスで生まれたのがマイケル・スタウトだ。本人いわく、「6歳の時には競馬に夢中になっていた」

そう、プロも裸足で逃げるほどの知識を身につけた彼は、十代の後半になると、地元のラジオ・バルバドスで競馬のコメンテーターを務めたという。

19歳となった1964年に、島を離れて英国に渡つた彼は、パトリック・ローハンの厩舎に職を得た。肩書きはアシスタントだったが、実質はローハン調教師に弟子入りしたようなものだった。その後、ダグ・スミス、トム・ジョーンズといった調教師のもとで修行した彼は、1972年に念願だった独立を果たし、マイケル・スタウト厩舎を立ち上げた。同年4月28日、彼の父親が馬主だったサンダルという馬がニューマーケット競馬場で勝ち名乗りをあげたのが、スタウト厩舎にとつての初勝利となった。翌73年にアルファダマスでスチュワーズC(芝6F)を、ブルーカシミアでエアゴールドC(芝6F)を制覇するなど、初期の活躍馬はスプリンターが多かった。

78年にフエアサリニアで英オークスを制し、クラシック初制覇。同じ年のロイヤルアスコットではシャンガムゾでゴールドCを制し、その名声は一気に高まることになった。

シャーガーで英ダービー初制覇を果たした81年、スタウト師は初めて、英国におけるチャンピオントレナーの座に就いている。これを皮切りにして、86年、89年、94年、97年、00年、03年、05年、06

年、09年と、10度にわたつてタイトルを獲得。これは、20世紀前半に12回獲得したアレック・テイラー・ジュニアに次ぎ、サー・ヘンリー・セルと肩を並べて、歴代第2位タイの記録となっている。

スタウト師は英国以外の主要競走にも積極的に参加。97年には、その前年に創設されたドバイワールドCをシングスビルで制覇。BCターフは、08年・09年とコンデュイットで連覇したのを含めて、通算4回制覇。10年にはワークフォースで凱旋門賞を制している。

そしてスタウト師と言えば、96年にシングスビルで、翌97年にはヒルサドスキーで、ジャパnCを制したことを、キャリアの長い競馬ファンの皆様なら、よく覚えておいでのことと思う。今年で44回目の開催となるジャパnCを2度制した調教師は5人しかおらず、そのうち外国人はスタウト師ただ一人である。

70歳を過ぎた頃から「もう辞めたい」が口癖になっていたスタウト師だったが、ついに決断を下したのが今年で、今季限りで退くことを9月10日に明らかにしていた。

88年、筆者が初めて生で観戦した二千ギニーを制したのが、スタウト厩舎のドユーンで、勝手に縁を感じていた調教師さんだった。

一つの時代の終焉である。